

mail:bunka1@ma.kitanippon.co.jp

獣医のカルテ



76



マイム犬猫病院長

(射水市小島)

長井 崇典

猫ブームが叫ばれてから久しくなりました。今や飼育数において犬を大きく上回る猫たち。そこで今回は、猫の口の中の病気のお話をします。

「よだれを垂らして痛そうにしている」「口がひどく臭い」「ドライフードを食べず、食欲が落ちた」などの理由で猫を連れて来院する飼い主さんが、しばしばおられます。

口をのぞくと多くの場合、口腔(口の中)の粘膜に激しい炎症を起す「歯肉口内炎」にかかっています。「後部口内炎」とも呼ば

猫の歯肉口内炎



口腔の後部粘膜に左右対称に炎症が起きて赤く腫れている

れ、写真のように口腔内の後部の粘膜に左右対称に炎症が起きて赤く腫れます。激しい痛みを伴ったため餌を食べたくても食べる事ができません。

犬の場合、歯周病に伴う歯肉炎は起こりますが、口腔後部の粘膜がここまで腫れる歯肉口内炎はま

激するさまざまな要因から起こると考えられています。現在のごころ正確な原因は特定されていません。

この病気の内科治療としては、抗菌薬の使用、炎症や痛みを抑えるステロイド剤の使用などがあります。残念なことに、これらの

抜歯で完治期待

方法では一時的に症状が改善しても再発を繰り返す、完治には至りません。また、治療が長期に及ぶため、薬の副作用の心配もあります。

最も有効な方法として行われているのは、外科治療です。臼歯(奥歯)を全て抜く「全臼歯抜歯」、または歯の全てを抜く「全顎抜歯」を行うことによって粘膜の炎症が治まり、完治が期待できます。

ただ、手術時間の長さや歯のなくなった愛猫の姿を想像すると、誰もが抜歯による治療をためらってしまいます。しかし、再発を繰り返し痛みで思うように食事ができぬまま痩せていく猫の姿は、飼い主さんをさらに不安にさせることでしょう。

歯肉口内炎は、生命に直接関わる病気ではありませんが、物言えぬ猫が口内の痛みにじっと耐えているのは痛ましい限りです。手術を受けて全ての歯がなくなったとしても、猫はまた、以前と同様に自力で食べられるようになっていきます。

もしも前述したような症状が現れたら、まずは動物病院で受診されることをお勧めします。そして、猫にとっての生活の質が落ちないよう、飼い主さんが日頃から配慮していただくことを心から願っています。